

平家歌人と万葉歌・万葉末証

千草 聡

一、緒言

院政末期、その栄雅と没落を華々しく歴史に刻んだ武門平氏一族、彼らは旧来の貴族達に立ち交じって和歌の詠作活動を嗜むなど、殺伐とした武士一族ではなかった。

実際、政権確立後に貴族化して和歌の詠作活動に携わった武門平氏の人間で、具体的にその詠作活動が現存する記録から窺える者、即ち忠盛・経盛・忠度・経正・資盛・広盛・通盛・業盛・行盛・重衡・隆衡・隆親・忠快は平家歌人と呼ぶにふさわしい。ここで武門平氏をもって平家歌人と称するのは、高棟玉系の公家平氏と高見王系の武門平氏は互いに系統が異なること、また前者は早くから宫廷にあって多数の歌人を輩出しているのに対し、後者は忠盛以降殿上して作歌活動を行い始めた、という系統上・歌人歴上の相違を勘案してである。久保田淳氏はこうした平氏の人々を「和歌を愛する風流な公達」と、また谷山茂氏は「平家歌壇」としてその詠作活動を捉えておられる。小稿ではこれら平家歌人の当時の歌界での作歌活動を、諸先学の御研究を踏まえつつ、当時の新風和歌形成の試行を象徴する『堀河百首』、就中、その万葉語の撰取・詠歌との関連から考察していきたい。

二、平家歌人と『堀河百首』

周知の如く、院政末期の歌界は六条藤家・御子左家等の歌学の家、

及び小規模な同好会的歌会——歌林苑や仁和寺歌壇など様々に分裂、大層混迷していた。加えて、『古今集』以来の伝統的歌風が閉塞的状況にあり、人々は新風和歌形成を企図して種々の試行錯誤を繰り返した。その試行錯誤の一つとして『万葉集』からの歌語撰取・詠歌の試みがある。無論、『万葉集』からの歌語撰取は、早く紀貫之や曾禰好忠等にも見られるが、この時代には歌界の全体的規模で『万葉集』が注目されていた。

こうした歌界の動きを反映して、三代集的な世界には取り入れられなかった歌語や新傾向の詠風・技巧の試作を行った『堀河百首』が成立した。『堀河百首』は組題・詠歌の両面で時の歌人の習作の手法にもなっており、その三代集にはない万葉語の撰取等を含む新風和歌形成の試行は、『堀河百首』に依拠した詠作や歌題構成を行った歌人にも影響を及ぼした。次に掲げる表は、平家歌人忠盛・経盛・忠度・経正に残る各々の家集中の所載歌における、他の歌集からの撰取状況を示したものである。

盛	忠	盛		
0	2	6	堀河百首	首
3		7	永久百首	首
3	*	*	久安百首	首
1	1	1	江帥集	集
5	*	*	忠盛集	集
4	2	0	後拾遺	集
6	6	4	小計	
能因3、散木2	古今17	拾遺20、散木4	その他	

経	度	忠	正	経	計	合
1	9	1	2	1	7	6
	5		1		6	1
	7		5	1	5	3
	2		0		4	1
	1		5		1	1
	3		1		8	2
3	7	3	4	3	1	7
古今5	拾遺4、古今5	清輔2	散木2			

右は平家歌人四人の家集中の歌数（各々忠盛一八三首、経盛一〇七首、忠度一〇〇首、経正一一〇首、総計五〇〇首。他者詠は除く）中に占める『堀河百首』等からの撰取状況である。ここでは明確に古今集、拾遺集と本歌と推定できる場合を計数とし、「花」「菖蒲」等古今以来伝統的に多数詠まれる歌題では、あえて本歌として数えなかった場合もある。この表を見るに、平家歌人が『堀河百首』『永久百首』『久安百首』各所収歌を踏まえて、また『古今集』『拾遺集』所載歌という、三代集及びその時代の和歌を踏まえて詠作する傾向が強い事が分かる。

付言するに、『後拾遺集』も含めると、経正以外はその一割弱にも達するし、また『堀河百首』『永久百首』『久安百首』からの撰取も数えれば、その割合は忠盛が家集全体の五割、他の三人は各各三割近くを占める。これは『堀河百首』において橋本不美男・滝

沢貞夫両氏が指摘された様な事、『古今集』を基盤とする詠作傾向が平家歌人にも該当することに他なるまい。さらに大江匡房（江師集）・俊頼（散木奇歌集）という『堀河百首』参詠歌人の家集からの撰取・詠歌も多く、平家歌人に対する『堀河百首』等の影響はかなり大きいと考えて良いだろう。なお忠盛息の三歌人経盛・忠度・経正に『忠盛集』からの撰取が多いのは、彼等平家歌人内で歌語撰取・詠歌の流れが存した事が考えられる。

三、平家歌人と万葉歌・万葉籍

さて、『堀河百首』には新風和歌形成の一試行として万葉語を踏まえた詠歌が見られるのであるが、平家歌人にも万葉歌・万葉語を踏まえた歌がいくつも見られる。そもそも忠度・経盛には各々『万葉抄』・『万葉集』の所持の記録もあり、全く当時の万葉研究に無関心ではなかったと考えられる。忠盛や経正にはその様な記録はないが、同様に無関心ではなかったであろう。事実、忠盛・経盛・忠度・経正の四人の詠歌中、三二首に万葉歌・万葉語の撰取が認められ、その中には万葉以来平家歌人までの用例がない語や、万葉歌の「心」と詞を同時に踏まえた例もある。それらを以下、いくつかに分類して考察していく。

甲、歌語的関心からの撰取

いわば万葉語に対する関心から撰取したと考えられる場合である。平家歌人以前の用例が殆どない為、新鮮かつ奇抜な詞取りといった感が強い。

（忠盛集異本系・六七番）

◎おもへただななのかしこき人だにも

こひにはたえぬものところきけ

右歌中の「ななのかしこき人」の語は竹林の七賢を指し、その用

例は万葉以来忠盛まで『堀河百首』中に一首見られるのみである。

○いにしへの七のかしこき人もみな竹を簪して年ぞへにける

(『堀河百首』・雜題第三・竹・一三一九・仲実)

○古之 七賢 人等毛 欲為物者 酒西有良師

いにしへのななのかしこきひとどもも ほりするものは

さけにしあるらし(万葉・卷第三・雜歌・三四三)

第二節で指摘した様に、忠盛は『堀河百首』所収歌を踏まえて詠歌する場合が多く、右もその一首と言える。これは仲実が万葉歌を踏まえて詠歌し、忠盛が更に仲実歌から詞取りして詠作したとも考えられる。ただし、忠盛が七賢の酒好みを恋情に置き換えて詠作しているあたり、仲実歌にはない万葉本歌の歌意の汲み取りが窺われ、大伴旅人の有名な「遣酒歌十三首」中から直接忠盛が撰取した可能性も否定できない。

さて、この忠盛歌中での万葉語、即ち清康潔白かつ超俗的な「ななのかしこきひと」(七賢)は、「こひにはたへぬ」という面白く奇抜な側面から捉えられており、他方その万葉語自体は用例の希少さゆえの新鮮さを詠歌に付加している。たとえ依拠した万葉本歌を知らぬ者でも、有名な竹林の七賢を詠んだ忠盛歌の面白さを理解し得るであろう。

(忠盛集流布本系・一一番)

備前のかみにてくだりけるとき、江暮春といふことを

◎すみよしの松もや思ふ月もまたほそえにかすむ春のなごりを

「ほそえ」という歌語を詠み込んだ詠歌は、万葉以来忠盛まで殆ど用例がない。この歌は「暮春」の情景を惜しむ心を詠じたもので、「ほそえ(細江)」には細い入江と、江上に細々と霞む月が掛けてあり、いわば掛詞を意図した詞取りである。更に「松もや思ふ」の句から考えるに、入江の向こうに消え去らんとする春の細さに対する詠者の心細さも、「ほそえ」の語に込められている様である。ちなみに万葉歌には「ほそえ」に詠歌者の主情を詠み込んだ例はない。「ほそえ」という歌語の万葉以降の使用例は一例のみで、忠盛と同時代の歌人相模に見られる。

○すみよしのほそえにさせるみをつくしふかきにまけぬ

人はあらじな(金葉集・四三六番歌)

この相模歌の本歌と考えられるのは、

○等保都安布美 伊奈佐保曾江乃 水平都久思

安礼乎多能米弓 安佐麻之物能乎

とはつあふみいなさほそえのみをつくし あれをたのめて

あさましものを(万葉・卷第十四・三四四八)

で、相模歌は「ほそえ」の詞取りの外に本歌の恋の意をも踏まえている。この歌の享受者が万葉の本歌を知っていれば、なお一層趣深く受け取る事が出来よう。しかし、忠盛は同時代の相模から詞取りしたとは考えられず、また右記以外の「ほそえ」の万葉歌中の用例にも明確に忠盛の詞取りを指摘できるものはない。その意味では、忠盛は万葉歌語の詞取りのみを行ったと考えられる。万葉語を詞取りし、それを古今的技法である掛詞に用いて主情を詠出し、加えてその歌語の持つ新鮮さを自歌に添えたものであろう。

子 日(忠度集・四番)

◎千世ふべき子日の松にそでかけてひくまの野べにけふはくらしつ
 忠度の家集『忠度集』の構成及び作歌の面に『堀河百首』の影響
 が見られる事は、犬井善寿氏の御論文で明らかにされている。右
 の忠度歌も『堀河百首』春題第二「子曰」、十八番の匡房歌、

○春霞たちかくせどもひめこ松ひくまののべにわれはきにけり
 を踏まえたと考えられ、外に、

○そでかけてひきぞやられぬこまつばらいつれともなき

ちよのけしきに（後拾遺集・卷一春上 二八・右大臣北方）
 も与つていよう。ここでは「ひくまの野べ（引馬野野辺）」の「ひ
 くまの」が万葉の地名である。「ひくまの野べ」の用例が忠度以前
 は匡房にしか見られない所から、忠度の匡房歌からの撰取は明らか
 で、その匡房が依拠した万葉歌は、左歌と推定される。

○引馬野尔 仁保布榛原 入乱 衣尔保波勢 多鼻能知師尔
 ひくまのにはほふはぎはらいらみだる ころもにはほはせ

たびのしるしに（万葉・卷第一雑歌・五七）
 匡房は万葉に詠まれた「ひくまの」を地名と松を「引く」の掛詞
 で用いた上で、「ひくまののべ」と詠んだのであろうが、万葉歌の
 心は踏まえていない。同様に忠度も匡房に倣って詞取りの面が強く、
 万葉歌の「心」は踏まえていない。

千鳥（忠度集・五六番）

◎うきねするいそまのうらのさよ千どり

ともよびかはすこゑきこゆなり

右忠度歌では「いそまのうら」という歌枕が万葉歌語である。「
 千鳥」題の詠歌は『堀河百首』冬七番題にある如く、数多く詠まれ
 ており、忠度は万葉以来使用例のない歌枕を撰取・詠歌する事で、

自歌に新鮮な感じを与えようと意図したのではあるまいか。忠度が
 詞取りした本歌は、

○月余美能 比可里乎伎欲美 神嶋乃

伊素末乃宇良由 船出須和礼波

つきよみのひかりをきよみかみしまの いそまのうらゆ

ふなですわれは（万葉・卷第十五・三六二）
 と推定される。忠度はこの万葉歌から万葉語（地名）を取ったが、
 万葉歌の「心」までは踏まえておらず、新奇さを目的とした詞取り
 と考えられる。なお「いそ」「うら」「千鳥」は縁語関係にあり、
 万葉の地名を古今的修辭法である縁語を通して用いている。

こうした万葉語の詠出には万葉語への関心が前提であり、ここで
 は万葉歌の「心」に拘らず、歌語に焦点を当てて撰取した場合の例
 を取り上げた。即ち用例の少なさをゆえに新鮮さを持つ万葉語を、古
 今的な掛詞や縁語を踏まえて用いる、換言すれば三代集的な技法を
 通して万葉語を撰取する形である。そしてこの平家歌人の撰取・詠
 歌の方法は、既に『堀河百首』歌人の用いた方法を模倣し、或は発
 展させたものと考えられる。

乙、詞・心を踏まえた場合

平家歌人が万葉の用語撰取と同時に、詞取りした万葉本歌の「心」
 をも踏まえて詠作したと考えられる場合について検討する。

（忠盛集異本系・一番）

◎けさみればみづわけやまをしこめて

かすみながるるはるはきにけり

忠盛歌中の歌枕「みづわけやま」は、万葉以来忠盛まで使用例が見られず、その依拠した万葉歌は、

○神左振 磐根己擬敷 三芳野之 水分山乎 見者悲毛

かみさぶるいはねこごしきみよしのの みづわけやまを

みればかなしも (万葉・巻第七雜歌・一一三四)

である。忠盛は万葉歌中の歌枕「みづわけやま」を詞取りし、立春・霞という古今以来の歌材に詠み込む事で、新鮮な感じを自歌に漂わせる事を意図したのであろう。さらに「みづ(水)」(「ながる(流る)」は縁語関係にあり、ここでも古今的修辭技法たる縁語を通して万葉語を詞取りしている。

なお忠盛歌は、霞を伴った春の訪れを詠じた立春の歌であり、万葉歌は「みづわけやま」を見て悲しく思う意である。ここから忠盛が万葉歌の「みづわけやま」に感得された「かなし」さを、祝うべき立春の今日は霞により「をしこめた」と詠じたとも取れなくはない。その意味では、忠盛は本歌である万葉歌の「心(歌意)」と用語を同時に撰取したと言えるであろう。

なお、この歌枕「みづわけやま」は経盛歌にも見られる。

家歌合に(経盛集・四番)

◎ゆふがすみみづわけやまにふかければ

たつともみえずはなのしらなみ

経盛歌も「みづわけやま」を歌枕の意と霞が「みづ(満つ)」との掛詞で用いており、父忠盛同様に万葉語を古今的修辭技法を通して用いている。但し、経盛歌の方は万葉本歌の「心」は踏まえ、詞取りのみの感が強い。

隔河恋(承安二年閏十二月東山歌合)

◎君があたりをはただ河のなくもがな

けたよりゆかはんはしもあやふし

右歌は『夫木和歌抄』一〇九七六番所載の経正の歌合出詠歌であり、「をはただ」なる語は「をばただのいただのはし」で万葉に詠まれている。この語は、

○小鵜田之 板田乃橋之 壊者 從桁将去 莫恋吾妹

をはりだのいただのはし のこほれなば けたよりゆかむ

なこひそわぎも (万葉・巻第十一寄物陳思・二六五二)と『万葉集』で詠まれているものの、経正歌とは第一句目の付訓が「をはりだ」と異なるので、経正が依拠したのは寧ろ同歌の『古今和歌六帖』に取られた、

○をばただのいただのはし のこほれなばけたよりゆかむ

こふなわぎも (第三帖・一六一九)ではあるまいか。因みに『古来風体抄』『俊頼髓脳』所載の同歌の付訓が『古今和歌六帖』所収歌と同一である点を勘案すれば、当時は『万葉集』所載歌より『古今和歌六帖』所収歌の付訓で通用していたものかとも思われる。

さてこの語の経正以前の用例は『堀河百首』にのみ見られ、付訓も『古今和歌六帖』所収歌と同一である。

○けた落ちて若むしにけりをばただのいただの沼にわたすたな橋

(雑部題第十・橋・一四三一・仲実)

○朝夕につたふ板田のはしなればけたさへ朽ちてたぢろぎにけり

(同題・橋・一四三二・俊頼)

○夜はくらし妹はた恋しをばただの板田のはしをいかがふままし

(同題・橋・一四三五・基俊)

右は『堀河百首』の中で「をばただ」乃至「いただのはし」の語を含む詠歌である。これら『堀河百首』歌人の詠歌中、基俊・俊頼歌では万葉歌の「心」（恋の意）をも踏まえた詠作で、今にも朽ちんとする板田の橋を渡って恋人に逢いに行く意を、基俊は「妹はた恋し」と詠じ、俊頼は「朝夕につたふ」と恋の意を詠出している。

経正も前記『堀河百首』歌及び『古今和歌六帖』所収万葉歌を用語・「心」の両面で踏まえている。経正の『堀河百首』に依拠した詠作活動からすれば、これら『堀河百首』を参照し、そこからその本歌たる万葉歌にまで遡及して撰取・詠歌した可能性は高いと言える。経正歌の四句目「けたよりゆかむ」が『堀河百首』歌人の詠歌にないのは、経正が直接本歌より撰取した事を示唆しよう。また用語のみならず、万葉歌の「心」をも「隔河恋」という恋題に踏まえて詠じた点、万葉歌の「心」と詞の双方を踏まえたと思われる。

故郷萩（忠度集・三五番）

◎萩原とみるぞかなしきたかまとのおのへの宮のむかししらねど
右歌にある「たかまとのおのへの宮（高円尾上宮）」は万葉語で、万葉以後には忠度運用例がなく、後の『新古今集』では数首詠まれている。従来「たかまと」は萩で詠まれ、万葉・古今等多数の用例が見出だされるが、荒廃した故宮「おのへの宮」を詠歌したのは、『万葉集』を除けば忠度が初見である。

その万葉の本歌は

○多可麻乃能 平能宇倍乃美也婆 安礼奴等毛

多多志志伎美能 美奈和須礼米也

たかまとのをのうへのみやはあれぬとも たたしきみの

みなわすれめや（万葉・巻第二十・四五三）

であるが、二句目の付訓が「をのうへのみや」では忠度歌と異なる。ちなみに当時の歌書『五代集歌枕』では「をのへのみや」とも付訓されており、忠度はこの様に約言された付訓の形に従ったものであろう。

そしてここでの忠度は、万葉歌の詞を取り、加えて万葉歌の「心」——荒廃した故宮への寂寥と感懐を、自歌中で「かなしき」と詠じている。従来美麗な萩で有名な歌枕を逆に悲愁の象徴と受け取って、悲しいまでに美しい「萩原」という具合に、万葉歌の「心」詠出したのであろう。これも万葉歌の詞と「心」を同時に踏まえた例歌である。

以上、万葉歌の詞と「心」の両面を踏まえて詠作した平家歌人の歌を検討した。歌枕「みづわけやま」は前項甲の様に、古今の修辞技法を通して用いられていたが、他の二例は寧ろ新古今時代の本歌取りに通じるものがあり、用例も平家歌人以降に多い。加えて掛詞・縁語等の修辞を通さずに直接万葉語を詠み込み、本歌の「心」を活かして用いている。

丙、万葉歌の「心」を変化させた場合

平家歌人の万葉歌・万葉語撰取において、万葉本歌の「心」を変化発展させて詠作した場合を検討する。

故郷董（経正集・一五番）

◎つむひともそでぬらしけりふるさとの

にはのすみれにをけるしらつゆ

経正の『堀河百首』所収歌に依拠する詠作傾向は既述の通りだが、

この歌もその一例である。

○ふるさとの浅茅が原におなじくは君と葦の花をつまばや

(堀河百首・春題第十六・葦菜・二五四・肥後)

経正が肥後歌を踏まえたのは、同語関係的内容的に「故郷葦」に合致するところから、間違いあるまい。その肥後は『万葉集』の

○茅花拔 浅茅之原乃 都保須美礼 今盛有 吾恋苦波

つばなぬくあさちがはらのつほすみれ いまさかりなり

わがこふらくは(万葉・巻第八春相聞・一四五三)

を本歌取りしている。

だが、肥後歌は万葉歌の単なる詞取りという訳ではない。即ち、肥後は万葉歌の春相聞の恋の意を自歌の下句に込め、四季題ではありながら恋の意を醸した詠歌、換言すれば故郷の「浅茅が原」の葦に、万葉歌で詠われる様な激しい恋を昔日の面影として想起し、「君」にもう一度逢いたい旨を詠じたとも取れる。万葉歌の恋の終焉が「ふるさと」の語に含意されており、万葉歌の「心」を発展させて詠歌している。

さて、肥後の歌には万葉歌の恋の意が下句に匂わされていたが、経正歌には明確な指標として恋を示唆する語はない。経正歌は、故郷の葦の露に昔を思い出し、その泣く涙が露と重さなあって袖が濡れる意と取れる。だが、その涙する所以は恋ゆえとも解せまいか。寧ろ万葉の本歌を知る者には「ふるさと」の「すみれ」に象徴される恋の趣を経正歌の裏面に感得し得た可能性も否定できないであろう。つまり、『堀河百首』歌人肥後が為した万葉歌の「心」を変えて撰取・詠歌する方法を、経正も肥後を模倣して行ったと考えられる。

水草ふねかくすといふ事を(経盛集・四一番)

◎たまえにはまだなつかりもせざりけり

あしわけをぶねおとのみぞする

右経盛歌中には万葉歌語「あしわけをぶね」が詠み込まれている。

○湊入之 葦分小船 障多見 吾念君尔 不相煩者鴨

みなといりのあしわけをぶねさはりおほみ わがおもふきみに

あはぬころかも (万葉・巻第十一寄物陳思・二七五五)

○湊入之 葦別小船 障多 今来吾乎 不通跡念莫

みなといりのあしわけをぶねさはりおほみ いまくるわれを

こずとおもふな(万葉・巻第十二寄物陳思・三〇一一)

この二首が「あしわけをぶね」を含む万葉歌で、二七五五番歌は『人丸集』にも採られている。それ以外に万葉以後経盛までこの語の使用例は見られない。

この万葉二首は共に恋の歌であり、小船が繁茂する葦を掻き分けて進む困難さが恋の情熱を掻き立てる趣向である。経盛はこの万葉歌の「心」及び用語を撰取したが、直に万葉歌の「心」を詠出しなかった。寧ろ四季題で詠歌し、その典拠たる万葉歌を知る者にはそれとなく恋の意を嗅ぎ取れる様に、裏面に万葉歌の恋の意を含ませている。即ち葦の繁茂する船着場で、恋人が「あしわけをぶね」で来るその「おとのみ」して姿は未だ見えない事を、期待と焦れったさを込めて待つ意が経盛歌の背後に看取されまいか。表面的には葦辺を進む葦分小船の歌であり、万葉歌の「心」(恋の意)を四季題に込めて(変化させて)詠歌している。

山家歌(忠盛集流布本系・二一番)

◎かきくらしあられたばしるみ山べは心くだくるものにぞ有ける

葦(忠度集・五三番)

○うちはらふ心ちこそすれたび衣袖にたばしる今朝のあられば
 霰を詠じた右忠盛・忠度歌中には、共に「あられ・たばしる」という万葉歌語表現がある。彼等以前の用例を見ると『堀河百首』冬部題第四「霰」所載歌に認められる。

○玉ざさにあられたばしる冬の夜はいとどぞさゆる十ふのすがごも
 (霰・九二九・公実)

○人目には霰たばしるわが袖を衣につつむ玉かとやみん
 (霰・九三三・顯季)

○夜をさむみ霰たばしる山里は昔のむしろにね覚めをぞする
 (霰・九三七・師時)

○ふる里のまきの板戸のつまびさし霰たばしる冬ぞさびしき
 (霰・九三八・顯仲)

また『永久百首』にも一例あり、

○ねやのうへにあられたばしる夜半なれどもとふすまは
 さえずぞ有りける(冬題第八・叡・三九〇・兼昌)

これら五首が忠盛・忠度以前の「霰・たばしる」の用例である。但し、『永久百首』兼昌歌は忠盛・忠度が詠歌の参考にした可能性は否定出来ないが、兼昌歌と忠盛歌・忠度歌は同語関係的内容的にも関連性は薄いので、ここでは参考程度に留めたい。

ところで、この万葉歌語表現を含む歌は『万葉集』二首あり、

○我袖尔 鬘手走 卷隠 不消有 妹為見

わがそでにあられたばしりまきかくし けずかもあれや

いもがみむため(万葉・卷第十冬雜歌・二二二六)

○霜上尔 安良礼多波之里 伊夜麻之尔 安礼婆麻為許牟 年結奈我久
 しものうへにあられたばしりいやましに あれはまるこむ

としのをながく(万葉・卷第二〇・四三二二)

二三一六番歌の方は『古今和歌六帖』七六四番にも採られている。ここで万葉歌二首を踏まえて『堀河百首』所載の前記四首を検討してみると、各々の歌人の本歌取りの程度は微妙に相違している。

即ち『堀河百首』歌人各々が二首の万葉歌の何れかから「あられたばしる」を撰取したのかは不明だが、顯季歌の場合、万葉二三一六番歌の用語と「心」——自分袖に降る霰を溶けぬ様に包み込んで早く妻に見せようという意——が、顯季歌の「袖」「霰たばしる」の用語撰取及び歌の「心」——他人の目に映じる自分の姿は霰を玉の様に袖に抱え込む姿であろうか——に窺われる様である。万葉歌の妻に霰を見せんとする愛情(恋の心)を、顯季は寧ろ裏に漂わせる形で、換言すれば「霰」題詠歌に万葉歌の妻思いの情を重ねて、詠み込んでいる。

更に顯季の万葉歌二三一六番からの本歌取りを示唆する内部徴証に、「たばしる」を霰の降る意とその時に「走る」意との掛詞に用いた点がある。顯季は霰の降る時に人々が霰に当たらぬ様に走る所を、万葉二三一六番歌の妻に霰を見せるべく急ぐ意を重ねて、私も妻に霰を見せるべく袖で覆って走ると人目に映らうかと詠歌している。それは他の『堀河百首』の三歌人の詠歌に見られない点であり、逆に考えればそれらの歌人は万葉歌二三一六番を踏まえていない、乃至は万葉の詞取りに終始した事を意味しよう。

さて忠盛・忠度の歌について、前掲犬井氏は忠度の四季題歌には裏に恋の意を含む場合が多いと指摘されているが、ここでの忠度歌も顯季歌同様に裏に恋の意を含むと取れる。忠度が『堀河百首』顯季歌を本歌取りした事は「袖」「あられ」「たばしる」の同語関

係に認められる。そして降る霰を「うちほらふ心ちこそすれ」と忠度が詠じたのは、万葉歌の様に霰を妻に見せる訳にはいかない「たび」ゆえ、袖に包むまでもないとの意と、それにつけて妻を思う意があるとも解せる。万葉歌及び『堀河百首』顕季歌を知る者には、忠度の「霰」題歌の背後に万葉歌の「心（妻思いの情）」を感得したとの想定も的はずれではないと思われる。

また忠盛も「たばしる」を霰が降る意と、旅人の霰を打ち払い足早に進む（走る）意との掛詞で用いている。その上、忠盛歌には前記『堀河百首』歌以外に

○かきくらし俄にもふるあられかなみ山おろしの風にたぐひて

（堀河百首・冬題第四・霰・九四三・紀伊）

も与っている。忠盛は師頼歌の山中の霰という情景を踏まえ、山中の霰に急ぎ走る意を忠度同様「たばしる」の掛詞的用法で、またその心細さを「心くたく」（霰が砕ける意と心配する意）の掛詞で表現している。加えて「あられ」「たばしる」「くたく」が縁語であり、古今的修辭法を駆使した詠歌である事が分かる。なお忠盛歌は万葉歌の「心」を踏まえたとは言いがたく、詞取りの面が強い詠歌である。付言するに、忠盛と忠度が同一の万葉語を撰取した点は、平家歌人間で万葉語撰取の流れが存した事を示唆しよう。その意味では忠度歌には忠盛歌も与っていると考えられる。

以上万葉歌の「心」を変化させて撰取した場合を検討した。万葉歌から直接（例えば、経盛四一番）乃至『堀河百首』歌人を媒介にその踏まえた万葉歌・万葉語を撰取・詠歌した場合（例えば、経正一五番、忠盛二一番・忠度五三番）があり、何れも本歌の「心」を

歌題の裏に含む形で表現している。そしてその万葉撰取の方法には『堀河百首』歌人という先達がいた事は、前節において導き出した結論と変わっていない。

四、結 語

以上、平家歌人の万葉歌・万葉語撰取と『堀河百首』との関連について、数首の歌を例に取って考察した。

すなわち平家歌人の万葉語直接的撰取と推測される場合は歌枕（万葉の地名）が題材になる場合が多く、これは当時盛んな歌学書『五代集歌枕』等の歌枕抜粋書からの撰取とも考えられる。また歌語撰取には少数だが独自と推測される場合があり（経盛四一番・前節丙項参照）、当時の万葉語撰取・詠歌傾向を意識し、独自に推進した詠作も認められる。しかし逆に考えれば、全体的に平家歌人の詠歌中の諸万葉語は『堀河百首』歌人を始め、当時の歌人たちが万葉と意識した範囲——歌枕抜粋書所収の万葉歌や『堀河百首』等が採った万葉歌——に大方重なるのである。これは『堀河百首』に依拠すること大であった平家歌人が、その範囲内の万葉語を中心に、またその撰取方法を模倣して他の万葉歌・万葉語を撰取していたと考えてよいであろう。

さて平家歌人の万葉撰取・詠歌自体については、詞取りの詠歌から後の新古今の本歌取りや歌枕の技法に通じる詠歌まで様々であり、ある意味では万葉歌の歌意をそのまま踏まえず、四季題の様な別の歌題歌の中に变化させて読み込み、それにより興行きを深く立体的にした面がある。具体的には本稿第三節の万葉の「心」を変化させた場合が該当するが、その詠作技法は、既に『堀河百首』歌人の為

している所でもあり、その延長線上に平家歌人の万葉歌・万葉語の撰取・詠歌を位置付けられると言ってもよいであろう。つまり新風和歌形成を企図した『堀河百首』の試行を踏まえ、その模倣的な面は多分にあるものの、徐々にその新しい詠歌技法等の試行を發展させていったところに彼等平家歌人の特徴がある。その意味でこの平家歌人の万葉歌・万葉語撰取に『堀河百首』は多大な影響を及ぼしていたと考えられるのである。

〔注〕

- (1) 和歌文学講座3『歌壇・歌合・連歌』桜楓社(一〇一頁)、昭和五十九年。
- (2) 『谷山茂著作集』第六卷所収「平家の歌人たち」(三九頁)角川書店、昭和五十九年
- (3) 忠盛は『久安百首』成立以前に没しているので、同百首からの撰取・詠歌は有り得ず、よって空欄とした。
- (4) 経正の場合、二十二で没したので十分な詠作活動を行っていないとも考えられる。それゆえ、ここでは経正を除外して言及した。
- (5) 『堀河院御時百首とその研究』研究編 橋本不美男・滝沢貞夫両氏、笠間書院、昭和五十一年。
- 右記三六四頁には「大部分の歌を支えている詠風の基盤は、やはり『古今集』集以来の伝統的な世界」との御指摘があり、平家歌人の詠作についても、このことは該当すると言えるだろう。
- (6) 忠度については、『忠度集』九一番歌に「盛方朝臣かきをき

たりける万葉抄を、かの人身まかりてのち、後家(「かの家」とあるのを改める——犬井氏の校異に関する御指摘による。)のもとへ返しつかはすとて」と、忠度が藤原盛方から「万葉抄」を借覧していた記事がある。また経盛は、仙覚文永三年本『万葉集』奥書に、仙覚が経盛本万葉集を以て校勘したとの記述があるところから、万葉集を所持していた事が分かる。おいて、国語国文、昭和五十四年五月。

- (7) 犬井善寿氏「『忠度百首』小考——『堀河百首』との関連において」、国語国文、昭和五十四年五月。
- (8) 『月詣集』所載歌では第五句が「はなのしら雲」となっている。なお小稿では語句間の異同の問題は言及の対象外としたので、ここでは『経盛集』の本文に従う。
- (9) 「をのへのみや」とある。右側に「をのうへ」と異文注記がある。
- (10) 『人丸集』二二二番歌に所載。但し、下句は「こひしきひとにあはぬころかな」となっている。
- (11) 前掲注(7)参照。四一頁。

なお小稿で引用の平家歌人の詠歌には、便宜上、稿者が濁点を付した。また用いた諸本は、『忠盛集』(異本・流布本とも)、『経盛集』、『忠度集』、『経正集』は『私家集大成 中古II』に所収されたもの。これら以外の『堀河百首』『永久百首』『久安百首』ほか勅撰集・『江帥集』・『散木奇歌集』等は『新編国歌大観』に従い、『五代集歌枕』は『日本歌学大系』別巻一所収によった。

(筑波大学文学・言語研究科研究生)